特集

盆栽の女王が住むまち 四国中央

盆栽――
小さな鉢の中に自然の風景を創り出す芸術
日本の伝統文化のひとつとして世界中に知られる

盆栽の代表格として黒松と人気を二分する「五葉松」（別名 ヒメコマツ）。その中でも、鮮やかな葉色や樹形の美しさから「盆栽の女王」と呼ばれているのが、本市土居町原産の「赤石五葉松」です。

本紙では、盆栽―赤石五葉松の魅力を国内外に広め、盆栽文化を守ろうと取り組んでいる人たちを2回に分けて紹介していきます。

初回となる今回は、赤石五葉松盆栽組合の日野勉（つとむ）組合長から、お話を伺いました。

五葉松に始まり 五葉松に終わる

一般的な松の葉が2本1組であるのに対し、5本1組になっている五葉松は、密に生じた短い葉や柔軟で枝を曲げやすい木質が盆栽に適しているとして、国内外から高い評価を得ています。

愛好家の間では「盆栽は五葉松に始まり五葉松に終わる」と言われるほど、盆栽としての醍醐味を備えた品種です。

原種を守り続けた 赤石五葉松

本市土居町と新居浜市の境にそびえる東赤石山（標高1707㍍）。その一帯に太古より自生している松の原種が、盆栽の女王「赤石五葉松」です。

葉が短く鮮やかな緑色で、葉の裏が銀色で美しいことなどが特徴の赤石五葉松。その歴史は古く、400年以上前からこの地方の特産物として知られています。

昭和30年ごろに始まった盆栽ブームは、赤石五葉松の名を全国区にした一方で、価格の高騰が苗や種の乱獲を招きました。しかし、生産農家たちの懸命な保護活動で、今なお原種が守り続けられていることも、赤石五葉松が評価されている理由の一つです。

樹齢約150年の赤石五葉松。樹が古くなると幹肌が白くなり、風格が出ることも特徴

後継者問題

バブル経済が終息し、盆栽ブームは収束。需要の減退と共に生産農家も減少していきました。そして現在、生産農家の高齢化と後継者不足が全国的な問題になっています。

種から育てる「実生苗（みしょう）」という方法で培養される赤石五葉松は、親木（おやぎ）と同じ性質を持つ接ぎ木や挿し木とは異なり、人間のように一つ一つの苗が個性豊かに成長することも魅力です。その反面、成長には時間を要し、種をまいてから「盆栽」として評価を受けるようになるまでに40年、更に「美しい」と評されるまでには、80年かかると言われています。

一方で、樹齢2～5年の若く安価な赤石五葉松を欲しいという声も多く、生産者さえいれば市場が広がるはずだと日野組合長は言います。

人間よりも長く生きる赤石五葉松を守っていくためには、後継者を育て、盆栽文化を継承していくことが何よりも大切です。

種をまいていく

多くの人に盆栽や赤石五葉松の魅力を知ってもらい、そして後継者問題の解消につなげるために、日野組合長を始めとする赤石五葉松盆栽組合では、さまざまな取り組みを行っています。

「盆栽の新たな見せ方を提案する」をテーマに、全国から集められた名品を着物や書、水引などとコラボさせ、愛好家以外も楽しめるようにした「新生盆栽展」。関川小学校の赤石五葉松クラブや、ユーホールで開催されている生きがい講座では、同組合の職人が講師を務めるなど、盆栽の魅力を幅広くPRしています。

これらの活動は、盆栽の裾野を広げ、後継者を芽吹かせる「種まき」だと日野組合長は話します。

次のページでは「種」のみなさんから、盆栽の魅力を伺いました。

「新生盆栽展」では、盆栽の最高峰「国風賞」受賞作品などを無料で見ることができる

「誰でも楽しめる盆栽講座」。アドバイスをもらいながら自身の盆栽を手入れする

毎年11月に開催される四国中央市産業祭には、生産農家や愛好家たちの力作が並ぶ

日野 勉 さん
Tsutomu Hino

赤石五葉松盆栽組合 組合長
盆栽水石 石鎚園（土居町上野）代表

高校卒業後、盆栽の名門・大樹園（だいじゅ）（愛知県）で修業。平成3年から石鎚園。盆栽の魅力を伝えるため、さまざまな活動を行う。
全国で20人のみが登録される宮内庁出入り盆栽師の1人。

教えて 盆栽の魅力 INTERVIEW

「成長が楽しい」「思いを引き継いで」

関川小学校 赤石五葉松クラブ

現在創部15年目。当初３人だったクラブ員は徐々にその数を増やし、今年度は９人が所属。活動は月に１回。赤石五葉松盆栽組合から４人が講師を務める。盆栽はクラブの中で代々受け継がれていく。

地元の赤石五葉松のことを知りたいと思って、４年生の時に入りました。クラブでは、講師の先生たちに教えてもらいながら、自分が担当する鉢の草引きや枯れた葉の剪定、芽摘み、針金かけなどをします。松ぼっくりから取った種で、種まきもしました。

最初に担当した盆栽は５年生の時に枯れてしまったので、今は２代目です。枯れた時はとても悲しかったですが、それをバネにして２代目を育てています。

五葉松の成長を、友達と一緒に見ることができて楽しいです。盆栽が好きなので、卒業しても続けたいです。

６年 **曽我部仁**さん（写真右から４番目）

私も一鉢担当しています。枯れた葉を取ると、次の時には新しい芽が顔を見せてくれるなど、盆栽は手間を掛ければ掛けるほど私たちに返してくれます。

子どもたちには、木と向き合い自然と触れ合う時間を大切にすることで、豊かな心を育んで欲しいです。そして、地域が大事にしているものを受け継ごうとしている人たちの思いを、引き継いでいって欲しいと思います。

担当 **藤田幸代**先生（写真左端）

右上 _ 校舎玄関脇に並ぶ盆栽。児童たちの作品と聞くと来校者は驚くという　**右下** _ ２年前にクラブでまいた種から作った苗　**左** _ 講師の１人井上訓臣さんは、盆栽インストラクターの資格を持つ

「小さな鉢に息づく生命力に感動」

川崎 加代子 さん

（土居町入野）

日野さんが講師を務める生きがい講座「誰でも楽しめる盆栽講座」を８年前から受講。自宅では豆盆栽や苔玉を数多く育て、苔玉の講師を務めることも。豆盆栽や苔盆栽の魅力を自身のInstagramで発信中。

庭木の剪定を習いたいと思い、生きがい講座を受講したことがきっかけでした。庭木と盆栽ではアプローチが真逆であると知った時は落胆しましたが、鉢の中で長い年月をかけて形を変えていく盆栽に魅せられて、現在に至ります。

私は盆栽の中でも「豆盆栽」と言われる手のひらサイズのものを、好んで育てています。豆盆栽は、その可愛らしい姿だけでなく、管理に場所を取らず、持ち運びが楽な点が魅力です。

その反面、水がすぐに切れてしまうので、水やりには工夫が必要です。中には枯れてしまう盆栽もありますが、枯れた木の脇から出てきた新しい芽を見つけると、この小さな鉢の中に息づく大きな生命力に感動し、畏敬の念が湧いてきます。

時間を忘れるほど作業に夢中になって、食事の支度が遅れることもしばしば。黙々と作業をしている最中に、よく顔がニヤけていると子どもから言われます。

盆栽や植物には無言の説得力があり、人間の営みがちっぽけなものに思えてきます。その姿に癒され、細々と生命をつないでいく様に「人生どうにかなるもんだ」と教えられる毎日です。

右上 _ 川で拾ったトチの実から育てた実生２年の豆盆栽　**右下** _ 菊間瓦の鉢に植えた実生５年の紅葉（画像はいずれも川崎さんのInstagramから）　**左** _ サザンカの苔玉盆栽

「盆栽だからできる 盆栽にしかできない」

土居高等学校 情報科学部（ビジネスコース）

菅野優磨部長（２年・写真中央右）
井原優弥さん（２年・写真右端）
中村亮介さん（２年・写真中央左）
徳永俊一先生（顧問・写真左端）

盆栽を生かした地域創生に取り組む。全国高校観光選手権訪日部門グランプリ（2018）、ディスカバー農山漁村の宝選定（2020）など、部活動でありながら多方面から高い評価を得る。

情報科学部では、徳永俊一先生の指導の下、４年程前から「赤石五葉松を生かした地域創生」をテーマに、さまざまな活動をしています。現在は「盆栽文化と盆栽景観の関連遺産」のユネスコ世界遺産登録を目指しています。

世界遺産に登録されるためには、資金や組織、法律など多くのものが必要です。でも一番大切なのは「世界遺産を目指す」という皆の意識です。

盆栽は世界的に評価されていて、特にヨーロッパでは、ピカソやゴッホの絵画と同じ芸術と捉えられています。四国中央市は、世界に誇る赤石五葉松の産地です。赤石山系にはその原生林があり、苗から育てて盆栽として出荷するまでの一貫したシステムが、今なお地域で受け継がれています。これらを世界遺産に登録しようという住民意識は、自然環境について知り、守っていく事にもつながると考えました。

昨年、環境省主催の「全国ユース環境活動発表大会四国大会」で、近年問題になっているマイクロプラスチックについても、世界遺産の登録を目指すまちづくりが有効であると発表しました。この発表が「ＳＤＧｓに貢献する特筆すべき活動である」と審査会に認められ「ＳＤＧｓ活動特別賞」を頂くことができました。

盆栽文化や赤石五葉松は、私たちの意識を、そして世界を動かす力を持っています。盆栽だからできること、盆栽にしかできないことがあると感じています。

四国中央テレビの協力で制作した盆栽文化のＰＲ動画。「世界遺産を目指すことで地球環境を救う」という理念に共感してくれる人を世界中から集めるため、７か国語で制作（画像はフランス語）